



日本現代文學全集・講談社版 74

集
一多雄
信磯民
野村條
牧嘉北

集 藤 一 整
編 伊 井 勝 郎
龜 村 光 夫
中 野 謙
平 本 健 吉
山

日本現代文學全集

74

牧野信一・嘉村礒多・北條民雄集

編 集

伊藤 整
龜井 勝一郎
中村 光夫
平野 謙吉
山本 健吉



昭和42年7月10日 印刷

昭和42年7月19日 發行

定 價 600圓

© KÔDANSHA 1967

著 者

いち
た
多
か
雄
しん
い
礒
た
民
の
野
むら
村
じ
よ
う
條
ま
き
牧
か
嘉
ほ
う
北

發 行 者 野 間 省 一

印 刷 者 北 島 織 衛

發 行 所 株式會社 講 談 社

東京都文京區音羽2-12-21

電話東京(942) 1111 (大代表)

振 替 東 京 3 9 3 0

印刷製刷株式會社
眞印株式會社
製本株式會社
製皮株式會社
背紙クロス
口繪用紙
本交用紙
函貼用紙
見返し用紙
扉用紙
大日本印刷株式會社
株式會社 興陽社
大製株式會社
株式會社 岡山紙藝社
株式會社 第一紙藝社
小林榮商事株式會社
日本クロス工業株式會社
日本加工製紙株式會社
本州製紙株式會社
安倍川工業株式會社
三菱製紙株式會社
神崎製紙株式會社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

牧野信一集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

爪……………七

父を賣る子……………二

父の百ヶ日前後……………一九

「惡」の同意語……………三六

西瓜喰ふ人……………室

鱗 雲……………齒

村のストア派……………八九

吊籠と月光と……………一〇三

西部劇通信……………一二

ゼーロン……………二五

酒盜人……………二五

泉岳寺附近……………二四

心象風景……………一四二

鬼涙村……………一五三

裸蟲抄……………一六三

作品解説……………平野 謙 四〇三

牧野信一入門……………吉田 潤 生 四〇六

年 譜……………四二三

參考文獻……………四二六

嘉村礒多集 目次

卷頭寫眞

筆 蹟

業 苦	一七
崖の下	一八
父となる日	一九
生別離	二〇
孤 獨	二二
足相摸	二三
曇り日	二五
牡丹雪	二七

不幸な夫婦	二四
-------	----

父の手紙	二五
------	----

秋立つまで	二五
-------	----

丸橋とのこと	二六
--------	----

七月二十二日の夜	二七
----------	----

途 上	二七
-----	----

來迎の姿	二九
------	----

神前結婚	三〇
------	----

作品解説	平野 謙 四〇
------	---------

嘉村礒多人門	吉田 潤 四八
--------	---------

年 譜	四九
-----	----

參考文獻	四九
------	----

北條民雄集 目次

参考文献……………三〇

卷頭寫眞
筆 蹟

いのちの初夜……………三五

癩院受胎……………三一

癩家族……………二四

道化芝居……………二七

作品解説……………平野 謙 三六

北條民雄入門……………吉田 烈 生 四二

年 譜……………四三

牧野信一集

病狀

牧野信一

凍てついた寒い夜がついてみた。

私は、十銭メートルの瓦斯ストーブに銀貨
を投げ込みながら、空の白むまで机の前に坐
りついていたが、一行の言葉も浮はぬ夜ばかり
だった。

寒い晩だつた。密閉した室で、赫々と火を起した火鉢に凭つて、彼は坐つて居た。未だ宵のうちなのにあたりには、寂として聲がなかった。

彼は二三日前から病氣と稱して引籠つて居た。別に、どこがどう、といふのではなかつたが、それからそれへと眠り續けたせゐか、頭はまるでボール箱の如くに空漠として、その上重苦しい酒の酔が錆び附いてるやうで、起きる決心が附かなかつたのである。焦れぬいてゐるのだつたが、頭は容易に自分のものに返らなかつた。尤も彼には、こんなことは往々の事で、一寸した新鮮な感じに行き當りさへすれば、ひよいと癒るのであつた。

室には煙草の煙りが蒸せ反る程詰まつて居る。午まで眠つて、残りの半日を煙草と濃い珈琲とばかりで暮してしまつたので一層ぼんやりして居た。——それでも彼は手から煙草を離さうとはしなかつた。金魚のやうに、ぶかぶかと煙を吸つては吹いて居る。

彼は早く癒りたい、と焦れるより他何も考へては居なかつた。ごろり寝轉んだり、又坐つたりしてゐる。時々大きな聲で出任せな唄を發した。つい無意識に餘り馬鹿馬鹿しい文句を吐いたのに氣が付くと急に可笑しくなつて、ひとりで笑ひ出しさうになつたりした。

「チェツ」と彼は舌鼓を打つた。さうして俄かに立ち上つて、着物の襟を正したり帯を締め直したりしたが、それでもいけなないので、此奴を懲らしめてやれといふ氣で、自分の手で自分の頭を一つボカ

リ殴つた。と又そんな仰山らしい事が可笑しくなる。密かに冷汗を覺えながら、他人に見られやしないかと周りに氣を配つたりした。結局は再びどろりつとなるより他はなかつた。呆然と天井を見詰める。又大きな聲が出さうになる。手はいつか煙草に觸れてゐる。——かうした動作が何遍となく繰り返されて來たのである。彼は何にも考へずに黙つて坐つて居る。

寝るのにも化粧をする程お洒落で、お轉婆な彼の従妹の道子は、丁度風呂から上つて唇や頬を塗り終へて、威勢よく梯子段をドンドン昇つて来るや、ガラリツと手荒く彼の室の障子を開けた。

「馬鹿——」

も少しで彼は道子を叱り飛ばすところだつた。

「まあ酷い煙り！ 毒よ。」

道子は顔を顰めて煙りを拂ひ除けながら、彼の傍に坐つた。

「ああ痛い痛い、どうもかう頭が痛んぢや、とてもやり切れない。」頭が痛いといふより他に病氣と自稱する自分の容體を發表する術はなかつたので、彼は如何にも感傷的な表情をして、道子の荒々しい態度が病人である彼に對しての順當な動作でないぞ、といふやうに、又自分が終日引籠つて居た事に勿體をつけるために、顚顚を一本の指先で突いて見せた。

道子は空とぼけてゐるやうな顔をして兩手を火に翳しながら、「だつて時々面白さうに唄など歌つてるぢやないの。それも、大きな聲で。」中々同情はしないよといふ風に答へた。

「紛らせようとしてさ。」と即答はしたが明らかに彼は弱點を握られたのである。口惜しいけれども事實だから仕方がない——辯解すべく餘りに頼りないみすばらしい病狀なのだから。いよいよ喧嘩をしなければならぬと思つた。

「僕は何も他人に同情を求めたくはないよ。まして道ちゃんなんか——。ハハハハハ。」

「おや、まあ變な兄さん。可笑しくもないのに、どうしてそんな氣味の悪い笑ひ方をするのさ。」道子は彼の眼を見た。

「ハハハハハハ。」彼は又笑つた。——考へて見れば全く其處に何の笑ふべき理由もない。彼は今道子から享けた痛手に惑はされて、自分の敗けたことを悟られてはならない、それに代ふるために罵擧な笑ひを洩らしたつもりでやつたのだが、全く道子に取つたら敗けたも勝つたも考へてゐる譯でなし、彼の笑ひが異様に寫つたのは無理もなかつたのだ。——やり損つた、と彼は思つた。

「兄さんは近頃餘程變よ。母さんはあんなだから随分心配してゐるのよ。——夜中に突然大きな聲を出したり、譯のわからない獨り言を云つたり……全くをかしいわ。妾可笑しくて仕方がありやしない。妾兄さんがどんな舉動をしたつて、幾日寝てゐようと平氣よ。だつて餘り馬鹿馬鹿しいんですもの、一體兄さんは横着で怠ける者のよ。此方こそ笑ひ度いわ。」

道子は抱へて來た折箱の中から美味さうなシュウクリームを出して盛んに食べ始めてゐた。

「何だい。病人のお見舞ぢやないのかい。」到底道子に遇つては敵はないとあきらめた彼は、寧ろ彼女に詫び度いやうな氣になつた。で、不斷の通りな冗談味のある口調でさう云つた。と、頭の鉛が急に溶けて、快活さと清新さとの血潮が溢れ始めた。「嬉しい！ やつと癒つた。」と彼は獨り言つた。今度こそは不調和でない笑ひをハハハハと洩らした。道子も「お氣の毒様よ。」と云つて笑つた。今まで大概の場合、彼は道子に敵はなかつた。如何に不機嫌に、道子を叱り飛ばして居ても、それ以上冷酷な道子の態度に接すると、一撃の下に敗けてしまつた。——さうして道子の華やかな世界に引き込まれない事が多かつた。

——憎い、いまいましい道子、と彼は思つてゐた。

彼は道子の顔を見るのも嫌になつた。彼は靜かに眼を閉ぢた。頭

はすっかり醒めてゐた。

その時は今眼を閉ぢたことに偶然な機會を見出した。それは、道子を偽つて彼女に不安を與へてやらうと思つたのだつた。

そこで彼は惱む者のするやうに兩手で確り頭を抑へた。

「頭が割れさうだ。」——暫く沈黙を保つた後に、——重々しい、そして發言に偶然のやうな調子を加へて、

「——氣違ひになるんぢやないかしら！」と低く呟いた。

「くだらない。」

道子の例の憎むべき冷笑の聲が彼の耳の傍に聞えた。食べてる舌の音もしてゐる。

彼は決して道子に云ふやうな態度を示さずに「僕は獨言を吐いたのだ。——狂人といふものには、かういふ靜かな瞬間に、ふいとなるやうに思はれる。」と云つた。

「ぢや、もう氣違ひになつてるかも知れないわ。」

道子は相かはらず冷やかな調子を保つてゐたが、稍々彼の獨白に動かされたらしかつた。

彼はびつかり眼を開いた。道子の顔色には明らかに不安の色が讀まれた。——彼は嬉しかつた。うまく效があつたらしい、どうだ敵ふまい、と密かに云つた。ここで、うんと道子を踏み躪つてやらなければ、時はない、と思つた。

「僕はねこの間Kさんから直接きいたんだがね、その時Kさんは自分が氣が狂つた時の氣持を僕に話したんだ、——狂人になる時の瞬間といふものはね、つまり眞人間から狂人に入る最初の一分さ、それは全く偶然なものだつてね。Kさんはある靜かな朝目を開いた時、ふと「おや俺は氣が狂ふんだな」と思つたのだつて、と殆ど同時にもう駄目になつて居たのだつてさ。急激な周囲の刺戟に突き當つて血が騰つたわけでもなく——ただある一種の空氣と自分の精神とが觸れ合つた一瞬間に、別の世界を見せられたのだ。よく歩いてゐる人が眞空域に觸れて突然筋肉の裂傷を見る場合があるぢやない

か、——何とか云つたね。」

「かマイチとか云ふわ。」

「それそれ、——丁度それと同じやうなものさ、精神といふものがある神祕な空氣に觸れれば、人間の精神だもの敵ふわけがない、立所に裂傷を負はされてしまふさ。當然在り得べき事だ——」

道ちやんも今云つた通り僕のこの頃の舉動は變に見えようが、何も僕は酔興にわざとかうして居るわけぢやない、僕の目の前には常に異様な幻が雪のやうに踊つてゐるのだ。Kさんもその二三日前には僕の通りだつたつて。これでもう一歩先の或るものが僕に見えた時は、もう今の僕……人間の言葉を巧みに使ひ得る僕ではなくなつてしまふのだ。僕はKさんの經驗を聞き又自分も同感し得、ある解釋が附けば附く程、今かうして坐つて居ること、刻々と時が刻まれてゆくことが怖ろしいのだ。僕だつて氣違ひになることは眞平だからね。」

彼は仰山らしく身震ひした。

「さう……？」

道子の心は明らかに欺かれて來た。彼女は不安げに眼をしばたきながら彼の言葉で思ひ當る事を探してゐるやうだつた。彼は内々會心の微笑を禁じ得なかつた。頭は益々明瞭になり平時に復してゐた。

「僕はこの現實を笑つたのではない。僕の怪しげな幻と微笑を交換したのだ。だから道ちやんから見たら十分氣味悪くも見えたらうが、僕自身にとつては別に不思議はなかつたのさ、ハハハハハハ。」

「——」

道子は彼の顔を穴のあく程凝視して居る。

「ハハハハ、ハハハハ。」

「——」

道子がだんだん眞面目になつて來るのを見ると彼は可笑しくてならなかつた。笑はずには居られなかつたのだ。彼は道子の珍らしく

も浮べた不安の色を見ると、どうしても笑はずには居られなかつた。彼は今自分が笑つてゐるのを、道子が案外にも彼の思ふ寸法通りに取つて怖れ始めたかと思へば、嬉しくつて堪らなかつた。

「兄さん——」道子は急に頓狂な聲を出して、慌てて指先を手布で拭うた。「全體家には氣違ひの血統があるんだつてね。今まで大抵一代に一人は出たつてえ事よ。」

「そんな事は今更云ふまでもない事だ——」

道子が稍々平伏して來たので痛快でならなかつたから、彼は強ひて尤もらしく嚴然と唸つて見せた。さうして彼は瞑想に耽けるが如き態度で、兩方の眼を据ゑてじつと窓の方を睨んだ。

「實はね、兄さん——阿母さんもそれでこの間から大變心配して居るのよ。妾は阿母さんの臆病や迷信はてんで相手になんかしやしないけれど、何でも兄さんの着物をそつと易者へ持つて行つて見て貰つたんですつてさ——だけど兄さんは本當に今云つたやうな事を信じて居るのですか、ええ？」

「誰が酔興に……」

彼にとつては、ここの處が中々の難關だつた。もう一歩道子を信じさせてしまはなければならなかつた。こゝらで一歩違へば立所に道子は劍のやうな冷笑を眞向から浴びせることは解つてゐる。さうなつてからいくら騒いだつてもうおつつかない。彼の見せ場はこの邊が最も六ヶ敷いのだつた。

「死ぬ死ぬてえ人に死んだためしはないてえが、何だか兄さんもその部類らしいのね。」彼女の眼は雲間を出た月光のやうに輝かうとした。「あふないッ」彼はヒヤリとした。

「まあ何とでも思ふがいいさ。僕は何も他人に話してゐるのではない。まして道ちやんなど其處に居ようが居まいが、何も道ちやんに同情を求めようとか心配させてやらうとかなどといふ馬鹿馬鹿しい考ではないのだから……そんな事は云ふのも面倒だ。——若しならなかつたら幸ひだが……どうも俺は……ああ頭が痛い——」

「そんなに痛むの? ……困つたわね。」道子が當惑の色を現した。彼は何年振りに、道子が他人のために困惑の情を示したか、殆どそれは彼の記憶になかった。

彼はわけもなく非常に嬉しくなつた。千載の恨みを晴したやうな気がした。然し彼はこの時次に言ふべき言葉を見出すことが出来なくなつた。勿論狂人になるなどといふ馬鹿馬鹿しい考へは持たうとしても持てなかつたし、そのままにして置けば當然再び道子のために折角の勝利を滅茶滅茶にされてしまはなければならないのだ——彼は膝に眼を伏せて、何と云つたらよいものかと考へ込んだ。道子は不安げに黙つてゐるけれど、好機逸すべからずの時であるけれど——どうしても言葉が見出せぬ。うつかりしたことは云へないと大事をとればとる程言葉が出ない、——彼は手持たさをまぎらさうとして鏡臺の引出を開けると錠が手に觸れたので、それを取り出した。そして何氣なく爪をバチバチと切つた。爪が火鉢の中へ飛んでギリギリ燃えた。

「あら! 兄さん! ……爪を燃すと氣違ひになつてよ。」

道子は慌てて彼の腕をおさへた。彼女の手先はブルブルと震へてゐた。

「ハハハハ。」と彼は笑つた。

「冗談ぢやないことよ。」

「迷信だよ。」

「だつていけないわ。」

道子は飽くまでも眞面目だつた。

「昔の人はね、そんなことをよくいふけれど、それには多少理由があるんだよ。今に化學をやると解るが爪の中には酸素の一種で笑氣と稱する原素が含まれてゐるんだ。それが發散すると、丁度クシャミ藥のやうに、人にくすぐるやうな感覺を與へるのさ。それから出たのさ。然し笑氣といつたつてほんとに人を笑はせる程多量に含まれてゐるわけぢやないさ。分析の結果さういふものがあるといふだ

けのことさ。」彼は説明しながら尙も爪を火にくべてゐた。

「しまつたことを説明しちやつた。」と彼は氣が附いた。折角道子の感情が高潮に達した處を——残念なことをしてしまつた、と彼は思つた。

「さう、やつぱり昔の人の云ふ事には何かしら原因があるものね。」案の定道子は平然としてしまつた。と同時にやつとのことで彼が欺いてゐた事すら凡て棄ててしまつたやうに道子はいつもの通りになつてしまつた。

「しまつた、しまつた、しまつた。」

彼は何遍も何遍も心の中で繰り返した。然しもうおつつかない。彼はこの上もなく残念だつた。指が無意識に動いて爪を切つてゐた。爪は幾つとなく火に燃えた。——道子は笑ひながら見てゐる。

一番大きな親指の爪を三日月のやうに切つて、徐ろに彼はそれをつまんで火の中に落した。ギリギリと音を立てて燃えていつた。ほんのわずかな煙りがフッと昇つた。

——もうどんな仰山な眞似をしたところで徒らに道子の冷笑を買ふばかりだ、と思ふと今更彼は悲しさが込み上げて來た。さう思ひながらも彼は爪をとつてゐた。道子は無論平氣で菓子を買つてゐる。

のばさうと思つてゐた小指の爪も、知らぬ間に彼は切つてゐた。軽い自暴自棄が彼の胸に擴がつて來た。これでもう全部切つてしまつたのだ。——爪は又かすかな煙りをたてた。——再び得られぬこの瞬間! なるやうになれ、と彼はここぞと思つてニヤニヤツと妻い笑を洩らして、道子に見せた。芝居にならぬことを内々切望しながら。

「チェツ、何さ! おふざけでないよ、バカ。」

道子は快活な嘲笑を彼の眞向から浴びせて大きな聲で笑つた。芝居になつてしまつた、しかも喜劇になつてしまつた、と彼は思ひながら兩脇に酷い冷汗を覺えた。で彼は今までの仰山な眞似を取消す

へく

「何でもないのさ。」と道子に合せて快活に笑った。

その夜彼は寝ながら呟いた。

「俺は道子の奴に惚れてるんだ。」

(大正八年十二月「十三人」)

* * *

處女作——交友——その他

「十三人」の第二號に「爪」といふ舊作を出した。それは二年前に書いた短篇なのだが、處女作といふわけでもない。「十三人」の一週年號に出した「闘戰勝佛」といふ西遊記から材を取つたものが、處女作だらう。

「爪」は發表後も藤村先生が手紙で褒めてくれた。その後私は初めて飯倉のお宅で先生にお目にかかつた。發表しない前、それは原稿で柏村と鈴木にも讀んで貰つた。それから三月號に「ランプの明滅」といふ小品を書いた。誰から、「早稻田文學」で宮島新三郎氏が褒めて居たといふことを聞いて、嬉しく思つたことがある。島崎先生が、「新小説」で新進作家號を出すから何か書いて見ないかといふことを傳へられ、私は、「凸面鏡」といふ十五枚のものを出して貰つた。これは、へんに固くなつて、活字になつて、讀んだ時ゾツとした。止せばよかったと思つた。後年、中戸川吉二と知るに及び彼からその批評を聞き、褒められたので意外だつた。中戸川とは佐佐木茂案の紹介で、たしか新橋の東洋軒で知つたのだ。佐佐木とは柏村の紹介で知つた。「十三人」は止めてしまつた頃だ。中戸川と佐佐木と三人で、二三回銀座あたりで會つたらう。その頃僕は目黒に居た。中戸川がそこには時々遊びに来た。文壇のいろいろの話聞くのは興味があつた。それから、私も時々中戸川の家を訪れるやうになつた。その時分「人間」の新進作家號に私はなんとかといふ愚作を發表した。題は覺えてゐるんだが、口にするのも嫌だからなんとかと言つて置くんだが、冷汗三斗する。だが、中戸川が好意を持つて大いに勵ましてくれたので、助かつた。

(貧しき文學的經驗)より)

父を賣る子

彼は、自分の父親を取り入れた短篇小説を續けて二つ書いた。或る事情で、或日彼は父と口論した。その口論の餘勢と餘憤とで、彼はそれまで思ひ惑うてゐたところの父を取り入れた第一の短篇を書いたのだ。その小説が偶然、父の眼に觸れた。父親は憤怒のあまり、

「もう一生彼奴とは口を利かない。——俺が死ぬ時は、病院で他人の看護で死ぬ。」と顔を赤くして怒鳴つたさうだ。だから彼は、それを聞いて以來、往來で父の姿を見かけると慌てて踵を回らせた。彼等はひとつの小さな町に住みながら、父と母と彼とそれぞれ別々の家に住んでゐた。

それ故彼は、もう父親には破れかぶれになつてゐたから第二の短篇は易々と書いてのけた。その上、今も彼が二ヶ月ばかり前から書きかけてゐるのは、またも父親を取り入れたものだつた。それが若し滞りなく出来あがつたら、彼はそれに「父を賣る子」といふ題名を付ける氣である——次の話は彼が未だその第一の短篇を書かなかつた頃のことである。

一

その晩も彼と父とは、酒を酌み交しながら呑氣な雜談に耽つてゐた。晩春の宵で、靜かな波の響きが、一寸話が跡切れると微かに聞えた。——父の妾の家の二階だつた。

「貴様の子供はいつ生れるんだ？」

忘れッばさを銜つて、父は彼にそんなことを訊ねた。二人とも、もうイイ加減酔つて、口角をそろへて親類の悪口を云ひ合つてゐたが一寸跡切れたところだつた。

「六月ださうだ。」と彼も父の態度を模倣してわざと空々しく呟いた。

「いよいよ親父になるのか、貴様が！」

父はさう云ふと、傍の女を顧みて仰山に哄笑した。

「そして——」と彼は云つた。この阿父さんは——と云ふのは具台が悪かつたので、眼だけで父を指摘して、

「いよいよお祖父さんになるんだよ。」と云つた。

「ばかア——」

でれでれした太い聲でさう云つた父は、云ひ終つてもあんぐりと口を開けたまま、笑ひ顔で彼と女とを等分に眺めた。

「貴様は幾つだ？」

「二十七だ。」

「未だ二十七か。」

「阿父さんは空つとぼけるから厭になつちまふ。」

「だが、二十七は……一寸早えな！」

「僕も内心大いに參つてゐる。」彼はさう云つて、安ッぱく首を縮めてにやにやと如何にも愚かし氣な苦笑を浮べた。

「尤も貴様が生れた時は俺は、何でも二十……」

「ええ、と？」

彼は眼をつむつて額を天井に向けた。五十一から二十七を引くと幾つ残るか？ を考へたのだが、容易にその答へが見出せなかつた。

「二十——二三だらうよ。」

「随分早えな！ ハッハッハ。」

彼は、今更の如く軽い心易さを覺えて、音聲だけ景氣好く笑つ

た。——尤もかういふ調子にならなければ、この家の變に亂れた空氣と調和しないので彼は殊更に甘い粗暴を振舞つてゐるのだつた。

親爺はともかく倅の態度が、それにしても過ぎたることを思ふと、これは決して他人には見せられない光景だ——と彼は思ふのだつた。初めのうちは彼達の對談をはたの女達も不思議さうに眺めたが、今では逆に慣々しくなつてゐた。おそらく彼の母は、他所で彼等がこんな振舞ひをしてゐるとは想ひも及ばなかつたに違ひない。「この頃俺は毎晩毎晩酒にばかし酔つてゐて自分の仕事は何もしない。これぢやどうもいけない。皆なは俺が東京に居るうちにはとても仕様のない暮しばかりしてゐたやうに思つてゐるが、この頃みたいにこんなにはだらしがなくてはなかつた。第一酒などをそんなに飲まなかつた——」

ふと彼はそんなことを口走つた。少々怪しくなつて來たぞ——彼は自分をさう思つた。

「皆な親爺が悪いから、といふわけかね。止せよう。」

「阿父さんも中々厭味を云ふことが上手になつた。」

頭の鈍い父と息子は、こゝでさきも可笑しさうにガラガラと笑つた。

「だつて——」と父は笑ひが止まると、一寸白々し氣に云つた。

「貴様は今仕事がないんぢやないか。夏あたりから例の會社に出る筈なんだから、まあもう暫く遊べ遊べ。」

「ああ、さうだね。」と彼は軽く點頭いた。彼が心では、どんなことに没頭してゐるのか？ まして文學に思ひを馳せてゐるなんてことは父は少しも知らなかつた。——下らねえ月給取りなんて止せ止せ、それよりも近く俺が材木會社を始める筈だから、そこに勤めろ——常々父はさう云つて、そんなことでは勵まされぬ彼を勵ました。いろいろ奔走してゐるらしかつたが、彼は父の仕事は解りもせず、寧ろ信用してゐなかつたので、上の空で聞き流すだけだつた。

「今日は珍しくお客がないね。」と彼は女に訊ねた。會社に關係する人々が大概この家に入入してゐた。さういふ相談をするには、どうしてもかういふ家を持つてゐないと都合が悪い——父は彼の母によくそんなことを話して、嫉妬深い母親の心を却つて苛立て、閉口することが多かつた。

「いいえ、もうさつきまで三人いらしたんですよ。」と云つて女は含み笑ひをもらした。「若旦那がいらつしやるといふことを聞いて皆さんお歸りになつちやつたんです。」

「若旦那、男前をあげたぞ。」

父はさう云つて彼をからかつた。五六日前彼は、母と細君に煽動されて、酒の勢ひで來客中のこの家に怒鳴り込んだのだ。

「この間はね。」と彼はテレ臭さうに、女に辯解した。「ありやア大芝居なんだ。……だつて阿母と周子の奴が煩くてやり切れなかつたんだもの……。」

「お前の女房もおつに氣取つてやがるね。俺嫌ひだア！」

父は、彼の母のことを既にのけ者にして云つた。

「俺も嫌ひになつたア。」と彼も云つた。「鼻が低くて、眼がまがつてゐる！」

「口が達者で、お上品振りだ。」

そこに二人坐つてゐる若い藝妓達が、口をそろへて「ほんとにこの間は、随分妾達も怖かつたわ。」——「若旦那は、お口は拙いけれどどこかお強いところがあるわね。」

彼女達が輕蔑してさう云つたのも知らず彼は、これは俺の威嚴を認めたに違ひない——と早合點して、一寸好い氣持になつて、

「ハッハッハ。」と鷹揚な作り聲で笑つた。そして瘦軀を延し、胸を擴げて、

「おい、お酌をしろ。」と眼をかすめて命令した。そして尙も自分の身柄も打ち忘れて、太ッ腹の男らしさを装ひ、

「うむ、お前達は中々別嬪だな。」などとお神樂の役者のやうな見

得を切つて點頭いた。

「ひとつ取りもつてやらうか。」彼の父は、彼の馬鹿さ加減に擦られて堪らぬらしく、失笑をおさへて彼を煽てた。「ほんたうだよ、女房なんてにこびりついてゐるのは……。」

「駄目？」と彼は、皮肉なつもりの眼を舉げて、にやりと父の眼を見あげた。さういふ言葉を父に吐かせてやらうと思つてゐたのだ。

「親に意見か！」

父は、ペロリと舌を出して平手でボンと額を叩いた。——彼は、厭な氣がしてぶつと横を向いた。すると、眼眦が薄ら甘く熱くなるのを感じた。

「親爺は……親爺は……。」この俺の酔ひ振りがいけないんだ、これが失策のもとなんだ——さう氣附けば氣附く程、彼の上ずつた醉の愚かな感傷はゼンマイ仕掛けのやうに無神經にとびあがつた。

「親爺は馬鹿だア！」

女は、居たたまれなささうな恰好でじつと膝を見詰めた。

「俺は親爺の眞似はしねえぞう。」と彼は更に口を歪めて叫んだ、だが、さう云ふと同時に心の隅が極めて靜かに——おっと、これは云ひ過ぎた。御免御免、あつばれな口は利けぬ——などと呟きながら——そしてただイイ加減に——まア、いいさいいさ——と誰のためともなくほつとした。

「おい、よせよせ、解つてゐる解つてゐる。」彼の父は手を舉げて彼を制した。

「解つてゐればこそ、か。」彼は自分でもわけの解らぬ獨言を、憎憎しく洩らした。——父は、一寸、心から氣持の惡さうな表情をした。

だが直ぐに氣持を取り直して、話頭を轉じさせるやうに、

「貴様の子、俺の孫には、何といふ名前をつけようかね。」と云つた。彼は、救はれた氣がしたには違ひなかつたが、そんなに想像を

樂しむと云つた風な言葉を、嘗て父の口から聞いた試しがなかつた

ので、揆つたく情けなかつた。で、ぶつきら棒に、
「だつて男か女かも解らないし——。」と手前勝手な不平顔を示した。

「多分男だよ。尤も俺は兩方考へてゐる。」

彼の心は、容易くほぐれた。

「嘘だア！」彼は、女が親しい友達に厭がらせでも云ふやうに、狡猾にへつらつた。

「いいえ、この間うちからいつもそんなことを云つていらつしやるんですよ。」と女が傍から加勢して、一寸彼の父をデレさせた。

「何でも家ぢや長男には英の字をつけなければいけないんだつてさ。」父は、軽く慌てて、それでもう孫を男と決めて、ごまかさうと試みた。

「阿父さんはしきたりが大嫌ひなんでせう。」

「この頃、少し俺もかつぎ家になつた。」

「第一阿父さんや僕は、長男だが英ぢやないぜ。」

「英の字をつけないと碌な者にならないんだつてさ。」さう云つて彼の父は、彼の顔を見た——そして二人は思はず噴き出した。

「さう云つて見れば弟の方が僕より質が好きさうだね、學校なども何時も優等で——。」

「さうだねア、ともかく今度は間違ひなく英の字を付けようぜ。」

「さうしようかね。」彼もその方が好きさうな氣がした。「おぢいさんの名前は銚太郎英福だね。」

「銚太郎か！」彼の父は久し振りで自分の父親の名前を聞いたといふ風にかう繰り返したが、直ぐに妙なセウ笑ひを浮べた。

「おぢいさんは、どうだつたの、僕にはとても優しかつたが——。」彼は、そんな出たらめな質問を發した。

「俺とはとてもお派が合はなかつた。」

「ぢや品行方正なんだらう。」

「臆病で、ケチ臭さかつた。」

「その前は作兵衛英清だね。」

「うむ、さうだ。」

「作兵衛英清を、阿父さんは知つてるの？」

「知らない。」

「作兵衛英清は少しは偉かつたんぢやないの？」

「どうだか……」話が少し抽象的になつてくると、源は自分にあるくせに彼の父は直ぐに退屈な顔をした。彼の母が、よく意味ありげな夢の話などをする返事もしなかつた。その點、彼はいくらか母に近かつた。

「だつて僕の小さい時分は、正月などにはきつとおぢいさんが、僕達を作兵衛英清の掛物の前に坐らせてお辭儀をさせたまへ。」

「チョッ、下らねえ。」

「英清の前は——。」

「よくお前はそんなことを知つてるな。」

彼は得意げに、

「定左衛門英經。」と云つた。

「ふふん——。どうでもいいや。作兵衛英清は何でも下ツ端の劍術使ひだつとよ。」

「それぢや英の字もあんまり當にならん——となるかね。」彼は、父があまり好い氣な冷笑をして獨り好がり過ぎる氣がしたので、その初めの提言をからかつてやつた。

「まア、いいさ。そんな夢みたいな話は止さうぜ。」父の醉は、がつくりと一段高まつた。

「そこへ行くど俺は偉いぞう。」

「そこへ行くど——とは怪しい言葉だ。」彼も次第に酔ひが増して、しみつたれの酔つぱらひらしく言葉尻にからまつた。

「いや俺は日本人たア量見が違ふんだ。頭が世界的なんだ。それを……だ。貴様の阿母の兄貴なんて、第一俺を馬鹿にしてゐる。俺はお稱荷様見たいな位は無いよ、だから大禮服の金ピカや勳章が何で